
心のうちに潜むもの

あおつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心のしづかに潜むもの

【著者名】

Z2948G

【作者名】 あおつき

【あらすじ】

周りと違う考え方を抱きながら生活している少女が、とあることをきっかけに変わっていくお話。

私はどうのような最期を遂げるのだろうか。そんな風に考える事が、時たまある。その時は決まって、誰にも知られずにひっそりと、異常者に原型を留めない位ばらばらにされ死んでいる自分の姿を想像する。こんな事を、家族や友達に話すことはまずない。というより、話したところでは普段の私を見ているものは、「冗談だとしか思わないだろう。

普段の私。客観的にみれば、単なる優等生で、これといった個性もなく友達もそれなりにいる。けれど、それは本当の私ではない。自分ひとりでいるときと、友達や家族の前での私は全然違う。本当の私を、段の生活の中で露呈していれば、友達は離れていだらうし、家族にいたつては私の異常さに驚いて精神科に私を連れて行くかもしれない。はつきり言ってしまえば、友達も家族も私にとってはどうでもいい存在なのだ、私の事をどう認識しようが、私の知ったところではない。家族との関係も友達との詰まらないやり取りにも、私は飽き飽きしていた、毎日の同じようなやり取り。刺激のない生活。幸い私は自分を偽ることも、愛想笑いをすることが得意であったから、人間関係においては17年間上手くやってきた。

けれどこのまま刺激のない日々を偽りにまみれた自分で生きていくのならば、死んでしまった方がまし、と中学に入った辺りから想いつになっていた、なぜそ

のように考えるよつに

なつたのかは自分でもわからない。ただ、「死」と言つものに対しての興味が自分の中で大きくなっている事だけは自覚することができる、自分の死に様を想像するよつになつたのも、

そのころからだ

無論、自分でなく他人の死体にも興味が沸くよつになつていた。「死」と言うものに興味を持つてば、死体とか、そういう類のものに興味が沸くのは当然、けれど自分を殺したいと私は思つてゐる。そう思うことが異常であるといつ自覚は勿論ある、けれど自分で自分を殺している状況や、自分が誰かに殺されている場面を想像すると、決まつて私は笑みを浮かべている。そういう事を考へるのが凄く楽しいのだ。一人でいるときは、いつもそんな事ばかり考へて笑みを浮かべている。それが本当の私、学校や家庭での私は、偽りの私に他ならぬ。

退屈な授業の終わりを告げるチャイムが鳴つた。今まで授業をしていた教師は適当に授業を切り上げ、教室から立ち去つた。とたんに教室は喧騒に包まれる、私が帰り支度をしていくと、一人のクラスメイトが話しかけてきた。彼女とは表面上仲良くしているので、向こうからはよく話しかけてくる事が多いが、私から話しかける事はまずない。向こうは私に関心があるようだが、私が彼女に興味を抱く事はない。唯一興味があるとすればそれは彼

女の死んだ姿ぐらいだ。目の

前で、そんな事を口にすることは一切ない。変に目だつてしまつて面倒臭いからだ、それに個性のない生徒として埋没しているほうが、退屈ではあるけど私は気楽に過ごせる。彼女との話の内

容は、一緒に帰ろうとか、そう言う類のものであつた、普段なら断る事はないのだが今日はなんとなく一人で帰りたいと思つたので断つた。

「今日はちょっと、忙しいから」

「珍しいね、あなたが断る事つて滅多にないのに。それじゃまた明日ね」

「うん、またね」

適当に返事をして、会話を終わらせる。彼女は何人かの集団で教室から出ていった。教室が

混み合つているのが煩わしいので、私はみんなが去つた後一人で教室を出た。他の教室はとっくに授業が終わつているらしく、教室の中に生徒は一人もいない、廊下にちらほらと残つている生徒がいるだけだ。途中すれ違つた教師に挨拶をかわして、私はその場から去つた。いつもど同じ時間に、いつもど同じ道を通つて帰る、この日違つたのはいつも一緒にいる生徒がいないだけである。それでも違和感は一切感じなかつた、大人數で帰つても、周りの事なんて紙の

ようにしか思つていなかつたから、適当に相槌を打つたり、作り笑いをしてその場しのぎを続けてきた私にとつて、一人帰るのも集団で帰るのも煩わしいものが無いだけで、大差はないのだ。

いつもの道をあるいていると、唐突に声をかけられた。見覚えのある制服を着ているから同じ

学校の男子生徒である事は分かったが、見覚えのある顔ではなかつた。

「初めてまして。いつも声をかけようと思つていたんだけど、君はいつも女子の集団の真ん中に

いるから、声をかけられなかつたんだ」

「いきなり何？」

私はふつきらぼうに返事をした

「ん、君と少し話がしたくつてね」

男子生徒に対する警戒は解かずには尋ねる

「話？すぐ終わるのならかまわないわ」

「ちょっと長い話になるかな、まあ君しだいだけど

「私しだいって、どう言う事？」

「ん、まあ話を聞けば分かるんじゃないかな」

埒が明かないと判断した私は、話を聞くことにした。

「いいわよ、どうせ暇だから」

「おや・・・？教室で言つていた今日は忙しいって言つのは、嘘なんだ」

なぜ彼はそんな事を知つているのだろうか・・・、教室での会話を聞いていたとは思えない、

何せ彼とは今日はじめて顔を合わせたのだから。疑問に思いつつも、私は彼に興味を持ち始めていた。

「・・・一人で帰りたかったから適当に言い訳しただけよ」

なぜ知つているのかとか、そう言う事はえて口に出さなかつた

「ふうん、でも、嘘をついた事に変わりはないだろ」

「そんなこと、どつちだつていいじゃないの」

焦らされていく感じがして私はなんとなくはらがたつてきた

「ん、今焦らされてるんじゃないかつて思った？」

心の中をみすかされたようで、不思議だつた。

「ええ、貴方つて私の心のうちが読めてこむよつた事を言つたね、
そんな事はどうだつて
いいけど。話つて何なの？」

「はは・・・、心のうちが読めるつて？それはきっと氣のせいだよ。

「彼はまた話をばぐらかそつとしている。

「話つて、何なのですか？用が無いのなら、私帰りますよ？」

「おつと、悪かったね。まあ立ち話もなんだから、あそこで話しますか」

そう言つと、彼は公園のほうを指差しつゝてくふうに言つと、公園のほうへ歩き出した。

あいているベンチを見つけると彼はそこに座つた、隣に座るよう促したので、仕方なく私は

彼の隣に座つた。私が座つたのを確認すると、彼は口を開いた。

「わざわざどうも。さて、本題に入るとしますか」

私は彼に対して警戒心むき出しであつた。そんな私をよそに彼は話を始める。

「君はいつも、自分の死んだ姿とか、自分が誰かに殺害される状況とかを、想像して心の中で

微笑んでいないかい？心中で微笑んでいるのは、学校にいるときや家族の前だとと思うけど、

一人の時は笑みを浮かべているんじゃないかと、僕は思つてゐる。これは僕の憶測に過ぎない、

けど実際君はそう考へてゐるかもしない、もし本当にそう思つているのなら『うん』と、

違うのなら『違つ』と、どっちかで答えてほしい

何で彼はその事を知つてゐるのだろう……、誰にも話した事はないのに出す事も

ないのに……。

私は、そんな彼を恐ろしいと思い始めていたが、その場から逃げる

ことはできなかつた。

気持ちの悪い汗をじつとりとかいているのがわかる。そして私は答えた。

「うん……、でもなぜ……貴方はこの事を知つてゐるのかしら?私は誰にも話した事が無いし、

口に出したこともない、それなのになぜ知つてゐるのかしら?」

彼は眉すら動かさずに答える

「本当に、そう思つていたのか。なぜ知つてゐるのか、うーんそうだな。信じる、信じないは

君の勝手だけど、僕は他人の心の声が聞こえる。まあ、全て聞こえるというわけではないけど。

思いが強ければ強いほど心の声は聞こえるかな。でも、君の心内は殆ど読めるようになつてしまつたよ、同じ人の心の声を聞き続けると、思いの強さなんて関係なく、聞こえるようになるからね。」

そこまで知つてなぜ彼は、私に話しかけてきたのだろうか、そんな恐ろしい事を考へてゐる私を

異常だと思わなかつたのだろうか・・・、それとも単になれているだけなのだろうか・・・、彼が

なぜそんな事を私に話したのか、私は全く理解することができない。

私は兎に角、彼が

怖かつた、これ以上心の中を知られると言ひ恐怖からなのか、何なのかは全く分からぬが、

怖かつた。

「君みたいな考え方の人間は、極稀にいるが正直とても怖い。心の声が聞こえる人間にとつては

特にね。思つてゐた事が聞こえるだけじゃなく、君が想像した映像までが、僕の脳にいきなり

飛び込んでくるんだからね。勿論心の準備なんてできるはずもない。

人の心の声が聞こえても、

次に何を考えるかまでは分からないから。突然目の前に君のバラバラになつた死体や、君が人を

惨殺しているシーンが飛び込んでくる。何度も何度もそれを見せられたら、正氣でいられるはずが無い

彼の様子は先ほど顔を合わせたときは全然違つていた。恐ろしい、私はそう感じて

逃げようとしたが、足が震えて全く動けなかつた。彼はそんな私を無視して言葉を続ける。

「心の声が聞こえるのは僕だけじゃない、他にもたくさんいる。君ののような考え方をもつている人間の

心の声を聞き続けて発狂してしまつたものもいれば、自殺をしてしまつたものもいる。幸い

そう言う考え方を持っている人間は少ないし、ある共通の考え方を持っているから。処分は楽なんだけどね。」

『处分』と言う単語が彼から発せられたのを聞いて、私は青くなつた、心の中は彼の前から

逃げたいと言う気持ちが溢れかえつていて。今は死への興味なんか、微塵もない。

「これは決められたことだから、君は逃げることも、避ける事もできないよ。あ、言い忘れて

いたけど、僕は心の声を聞く以外にもできる事がある、今の君なら分かるよね」

逃げたいと思つても体は全く動かなかつた、動かそうとしてもそのすごい重さの錘をつけられたように、全身がけだるい。こうなつている原因はきっと彼の力によるものなのだ。私には

どうすることもできない、そう思つた瞬間、私は生きる事をあきらめていた。

「やつと、あきらめたようだね……。僕だってこういう真似はしたくないが、君のせいでは

僕の大切な友達が自殺してしまったんだ……、君のよつた考への人間は『処分』する、と言う

決まりだから僕はどうすることもできない。それに僕も君に大分苦しめられたよ……。もう、

我慢の限界なんだ。だから今日君の心を操作して、一人で帰るよう仕組んだ。『今日はちょっと

忙しいから』あれは僕が君に言わせた言葉だよ……。

彼は殺意に満ちた目でそう語っている。

『君みたいな危険な人間は、『処分』する。なるべくならこういう形はとりたくないかった、

でも無理なんだ……、さよなら』

次の瞬間、私は無残な死体となつていた……。どうしてこんな事になつてしまつたのだろう……。

あまりの理不尽さに、私は泣きたかった。けれど……泣く事はもうできなかつた、涙を流すこ

ともできなかつた。死にたい……、死に対する実感がなかつた私は、自殺したいと考えていた。

だが、こんな形で命を失おうとは想像していなかつた、いや想像で起きるはずが無い。現実的には

ありえない存在に、私は殺されたのだから。

ふと、疑問に思った私は死んだはずなのに、何故自分の死体を目の前にしているのかと……。

私はまだ公園にいる……、隣を見ると彼がたつっていた。そして私に話しかけてきた。

『どうだつた？僕の見せた映像は？なかなか怖かつただろ？』

私は彼の言つてゐる事が全く理解できない……。

『えつと……、処分つて……貴方はいつたい私に何をしたの？私は死んだのではないの？』

私は困惑した瞳で彼を見つめている

「ん…、処分って言うのは、僕らが君に見せられた物を、恐怖のどん底に突き落とした上で

いきなり見せるというものだよ。相当怖かつただろ?」

私は自分が無事でいられたことを知つて、安堵した。そして、死と言つものがどれほど

怖いものなのかを実感させられて、死への興味は一切なくなつていった。けれどまだ、全身の震えはとまつていない。

「う、うん…。凄く怖かった…。」

「僕はね、毎日のようにあれを見ていたんだ、どれほど辛いか分かつたよね?また君がそういう

終え恐ろしい考えをしていたら、次は本当に『処分』するからね。彼は優しげな声で言つた、先ほどの殺意に満ちた目はしていない、そんな彼を見て私の震えは

いつの間にか止まっていた。彼は続ける

「僕の他にも、心の声が聞こえる人間はたくさんいるのだからね…、君もしばらくは同じ境遇を

味わうことになるだろうけど、死ぬよりはましだろ?」

命が助かつただけで私は満足だった、だから彼にこう告げた。

「本当にごめんなさい、今まで恐ろしい思いをさせてしまつて」

「なに…、君の恐怖に比べたら微々たる物さ、僕らは慣れているから、君もがんばれよ

一週間で元には戻るけど、心の声が聞こえるのは、君が思つているほど楽ではないのだから……ね」

彼は複雑な表情でそう言つと、寂しそうに去つていった。

公園から家に帰るまでの記憶は、よく覚えていない…。気づいたら家の玄関の前にいた、

まだ日は暮れていなかつたから、いつも通り帰つてこられたのだと
私は安堵した。私は玄関の
ドアを開けた。

「ただいま」

「あら、お帰りなさい。今日は早かつたのね」
その時母の心の声が聞こえた、今日も無事に帰つてきて良かつた、と。

私は自分が愛されているのだなと実感した。そして忘れていた家族の大切さを思い出して涙をこぼしていた。そんな私を母は抱きしめてくれた。私はじばらく母の胸の中で泣いていた。

「どうしたの…？いきなり泣き出して？」

「ううん、なんでもない。今まで、ごめんなさい」

母は怪訝そうな表情で私を見ていたがそんなことは気にしなかつた。

もう一度と、自殺したいなどと私は思わないだらう。心の声が聞こえる状態で一週間過ごした

私は、何もない平凡な日常生活がどれだけ大切かをかみしめていた。自分に关心を示してくれていた

友人を今はとても大切にしている。あの日彼に会わなかつたら今の私はなかつただろう、私は心中で「ありがとう」「大きく叫んだ、きっと彼と会う事はもうないけど、私が彼の事を忘れる事は一生ないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2948g/>

心のうちに潜むもの

2010年12月29日08時33分発行